

## 盲導犬 (1)

日本ライトハウス職業生活訓練  
センター和歌山行動訓練所  
次長 日紫喜均三

### 1. 盲導犬運動の起源

犬と人の出会いは、非常に古く1万数千年もの昔にさかのぼるできごとであり、盲人たちと犬との出会いも同様に古いもので、何千年前から、盲人たちが犬を話し相手や案内者として使用していた。ただ組織的な犬の訓練は18世紀まで皆無であった。最初の記録はフランスにあり、19世紀であった。パリのある盲患者には通りを導く犬が提供された。知られる限り、盲人を導く犬を科学的に訓練した最初のひとは、ウィーンの盲人訓練施設の創設者であるヘル・ヨハン・クライン神父 (Father Herr Johann Klein) であり、彼は1819年にそれらの訓練とその扱い方に関する本を出版した。

盲導犬の訓練の考案はフランスからオーストリア、スイスへと伝わったが、初めの意気込みとはうらはらに組織は衰えるかのようであった。事実上は第一次世界大戦 (1914~1918) が巨大な範囲の盲目を引き起すまではほとんどなされなかった。

結果として、盲人の案内者として役立つ系統立った犬の訓練が1916年ドイツで始められた。1925年頃にはこの学校の成功がドイツの赤十字に採用され、他国にも広まっていった。とりわけスイスで赤十字や警察のためにシェパード犬を繁殖し、訓練していたアメリカ人のドロシー・ユースティス夫人 (Mrs. Dorothy Eustis) に興味をもたせた。彼女は1925年と1926年にドイツ・ボーツダムにある盲導犬訓練学校を訪問し、感銘を受けて、その感銘の記事を1927年11月付のサタディ・イヴニング・ポスト (Saturday Evening Post) に詳しくのべた。この雑誌はアメリカで非常に人気があったため、英語を話す国々の人達にあっという間に広まった。盲人の目の代りになるように訓練するありさまを詳しく説明しているこのポスト誌を父親に読んでもらった

テネシー州ナッシュビルに住む、一盲青年モーリス・フランクは彼女の記事が本当なのかどうかを確かめるため、ユースティス夫人にすぐ手紙を書いた。

「あなたのお書きになったことは本当のことなのでしょうか？ 本当なら、私はそのような犬の1頭がほしいのです。いや私ひとりではありません。私と同様に盲目の何千人もの人々が他の人たちに頼らなければならないことを心の底から嫌っております。私を助けて下さい。そうすれば私は他の盲人たちに手をかします。私を訓練して下さい。そうすれば、私は犬を連れて帰ってこの国人々に、盲人がいかに安全にひとりだちできるかということを見せてやります。それから、われわれはこの国に訓練センターをつくって、新しい生活への門出のチャンスにそれをほしがっている人たちに分けてやることができます。」 実際、まだユースティス夫人は盲導犬の訓練をしていなかったのだが彼に返事を出した。「1頭の犬を求めて、モーリスがはるかはなれたナッシュビルから勇気をもって、スイスへと旅をするなら、あなたのために犬を見つけ、立派な訓練士にその仕事をさせます。」 旨を伝えた。

その後、ユースティス夫人は自分の育てている犬をモーリス・フランクのために訓練しようと決心し、彼女のところの有能な訓練士であるジャック・ハンフリーにこの困難な仕事をさせ、見事に完成させた。彼に訓練された雌犬のバディは歴史の中での1つの有名な物語となった。

1929年にユースティス夫人は、彼女のところの主任指導員ジャック・ハンフリー、ドイツのシェパード犬の繁殖で有名なおじのウィリィ・エヴェリング、それにモーリス・フランクたちと共に、今や世界で有名な“シーアイング・アイ”という盲導犬学校をニュージャージー州のモーリスタウンに建設した。そのときはまだ指導員も十分ではなかった。ユースティス夫人は彼女の警察および救助犬の訓練所の設立のため、いったんスイスへ戻り、ローザーネに訓練士養成のための新しい学校を建て、この学校から資格のある盲導犬訓練士を4名誕生させた。その後、学校の経営悪化のため彼女はスイスをとり払い、4名のうちの2名の指導員を連れ、アメリカのシーアイング・アイへ戻った。また1名の指導員はイタリアへ、残りの指導員ニコラス・ライアクホフは英国に渡った。彼が

渡ったワラシィにある盲導犬訓練所はすでに訓練が開始されていて、方法も近代的であった。

英国の盲導犬協会はこのライアクホフの元に偉大な発展をとげ、彼は最高責任者として28年間も君臨した。ちなみに、英国の盲導犬運動の始まりは、ユースティス夫人がスイスの盲導犬訓練学校の働きを英国の新聞に掲載したことから端を発し、1930年、このことが幾人かの熱心な委員の成立を起させ、1933年に英国に永久的な基礎を設立させた。現在英国には4つの訓練所があり、年間推定300頭の盲導犬が作出されている。

オーストラリアの場合は1950年、アーノルド・クック(Mr. Arnold Cook)西部オーストラリア大学講師が英國に於て、学士号取得の研究を終えオーストラリアへ戻った。そのとき彼は英國の盲導犬協会から得た盲導犬ドリーナと一緒にいた。これが最初のオーストラリアにおける訓練された盲導犬であり、1951年、パースに訓練所が建設され、盲導犬運動が現在の国際的に認められた状態へと進展していった。英國でアーノルド・クックとドリーナを訓練したミス・ベティ・ブリッジ(Miss Betty Bridge)がオーストラリアでの盲導犬の訓練を開始し、オーストラリア最初の盲導犬ビューザ誕生させる。

1955年には英國の盲導犬協会の最高責任者であるライアクホフと徒弟の関係にあり、数年間英國の盲導犬協会で指導員として従事していた、ミスター・ケイス・ホールズワース(Mr. Keith Holdsworth)が所長として招かれた。1956年にはミス・ベティ・ブリッジは念願どおりこの役を退いた。西部オーストラリアのパースに建設された盲導犬訓練所が、パースの夏が非常に暑いことと地理的条件により、1962年、メルボルンに移され、現在に至っている。

盲導犬運動はアメリカにおいても急速かつ強く進展して、現在アメリカには3つの主な組織があり、6ヶ所ないし8ヶ所の訓練所がある。盲導犬訓練所はオランダ、ベルギー、イタリア、イスラエル、南アフリカ、ソ連そして今やヨーロッパのほとんどの国々に存在し、効果を表わしている。

## 2. 日本における盲導犬の歴史

日中戦争の起り初めの1938年、アメリカからゴードン(Forbus Gordon)という若い紳士が侍医のメイソンと共に、世界旅行の途中、盲導犬を連れて日本に立ち寄った。これが日本に紹介された最初の盲導犬であり、この1つの出来事により、1939年には、日本に盲導犬4頭が日本の熱心な愛犬家たちによって、ドイツのポーツダムにある盲導犬学校から輸入された。これら4頭の盲導犬は再訓練された後、陸軍病院で加療中の失明軍人たちに提供された。

その中のひとり、山崎金次郎氏と盲導犬チトセの活躍ぶりがしばしば新聞に報道された。次の記事はその1つである。

「完全に主人の半身、交通信号を守り人間も及ばぬ働き、盲導犬“チトセ号”雨の日も風の日も盲目の主人の眼となり足となって、大阪近郊はもとより、遠く東京まで、まる8年間よきガイドを勤めている優秀な盲導犬がいま大阪の人達の話題となっている。—これは大阪豊中市でラジオ修理業、山崎金次郎(32)氏の忠犬“チトセ号”で、同氏が昭和14年9月、戦争のため両眼を失ない、元陸軍病院に入院中に与えられた盲導犬で、現在日本で活躍中の盲導犬の中では最優秀と折紙がつけられ、人間も及ばぬ働きを見せており、近く大阪府から晴れの表彰を受けることになっている。……」

その後、日本の盲導犬事業も一端、関係者の努力もむなしく途絶える。

1957年、塩屋賢一氏によって国産の盲導犬第1号チャンピィと河相冽氏とのペアが誕生し、1969年には、アメリカへ行って盲導犬の訓練を受け帰国した盲導犬所有者の数も含め、日本の盲導犬の数は14頭になっていた。

1970年7月から1971年7月まで、オーストラリアのメルボルンにあるナショナル ガイドドッグ アンド モビリティー トレーニング センター (National Guide Dog and Mobility Training Centre) に指導員を留学させ、その指導員の帰国と同時に、社会福祉法人日本ライトハウスの盲導犬事業がスタートする。

全国には国家公安委員会の指定する盲導犬訓練所が6ヶ所あり、それらは次のように分けられる。

- ① 東京盲導犬協会（東京）
    - 日本盲導犬協会（東京）
    - 栃木盲導犬センター（栃木）
  - ② 札幌盲導犬協会（札幌）
    - 中部盲導犬協会（名古屋）
  - ③ 日本ライトハウス（和歌山）
    - ① 東京盲導犬協会の塩屋氏式訓練方法を受継いだ人たちが日本盲導犬協会、栃木盲導犬センターを設立させ、後になって富山の盲導犬センター、関西盲導犬協会（京都）、福岡盲導犬協会（福岡）も誕生する。
    - ② 札幌盲導犬協会と中部盲導犬協会に限っては、過去に畜犬業者である東京畜犬K.Kが会社の利潤のため盲導犬にめをつけ、イギリスからハロード・ロブソンとケネス・クリーの2名の指導員を招き、盲導犬訓練所を開設したのがきっかけである。この会社は事実上1年で訓練所を閉じ、破産するのだが、この2人の下で働いていたひとりが札幌盲導犬協会、残りのひとりは中部盲導犬協会を設立させた。
- 以上のようなことから、横のつながりがあるよう見えるが決してそうではない。また訓練方法も日本ライトハウスのオーストラリア式とからは異なっている。
- 次に記す盲導犬の育成される過程は日本ライトハウスで実施されているものである。

### 3. 子犬の繁殖計画

日本にいる生後1年から生後2年までの中型犬を100頭集めて、盲導犬の訓練をするにふさわしいかどうかのテストをしても、盲導犬になれる犬が1頭か2頭いるかどうかである。オーストラリアや英国、アメリカでは早くから繁殖計画が立てられ、優秀な成績が認められている。現在約65%が盲導犬になっている。一般に訓練さえすればどんな犬でも盲導犬になると考えられがちだが決してそうではない。またそのための特殊な犬種が存在するわけでもない。犬

の持つ個々の性格によって決定される。成長過程の犬をとりまく環境が性格、行動様式に影響を及ぼしているのと同様に、遺伝もそれらに大きな力を及ぼしている。人間にも生まれながらの性格、直せない欠点があるように先天的に有した性格を変えることは不可能であると言える。同様に犬においても、訓練で矯正できない部分があり、またそれを矯正したとしても、盲導犬に必要な仕事に対する喜び、率先力というものが完全に損われてしまい、そこには本来あるべき盲導犬の姿をもはや見ることはできない。

盲導犬の訓練は視覚障害者の命令によって動く機械を作ることではなく、高度の判断力、率先力をつけてやることであり、その犬の持つ長所を伸ばしてやることにある。そこにはおのずと良い性格、悪い性格の犬の能力差が顕著に表われる。したがって良い遺伝資質を持った犬で繁殖が行なわれなければ無駄が多く、計画性に乏しい。系統だった繁殖は肉体的精神的な欠陥の改良を促進する意図と計画性が付随している。

より一層の安定した犬の供給をはかるため日本ライトハウスは、オーストリアのセンターで厳選された種牡 2 頭、種牝 2 頭を元に繁殖計画を進めている。

#### 4. パピーウォーカー制度

盲導犬の適性テストの結果をみると、盲導犬になれなかった犬の原因の多くに、生後 1~2 ヶ月になるまでの育て方にミスをしたため、飼育の仕方に問題があったためというのがある。盲導犬づくりの中で、後天的影響としての子犬の育てられる環境、周囲の人々の与える影響を考慮することは大変重要である。

この点に着眼して考えだされた子犬の育て方のシステムがパピーウォーキング計画（里親制度）である。生後 7 週間になる子犬を生後 1~2 ヶ月になるまで一般家庭に預け、人間社会を学習させる機会を与えることと正しい世話の仕方の指導により、心身共に健康に育てることを目的としている。この子犬を預って下さる方をパピーウォーカー（Puppy Walker）と呼んでいる。この名の由来は、子犬にさまざまな経験を与えるため戸外へ連れ出し、一緒に歩いて励まして慣れさせるところにある。盲導犬育成にとってこのシステムの果す役割

は大きく、オーストラリアの場合は訓練所の存在するメルボルンの地域に約60家庭が社会奉仕している。ところが日本の場合は歴史風土から犬に対する考え方が諸外国とは違っていたり、生活様式の相異から犬を家の中に入れて飼う習慣がないため、パピー・ウォーカーの絶対数が得られず、人間社会の中に同化して、その本来の姿を発揮すべき盲導犬にとっては頭の痛い問題である。

世界に類をみないシステムの導入を考えたのが、擬似パピー・ウォーカー制度で、一般の家庭に預けられない子犬たちに人間社会の交流を深めるため、訓練所内に8帖の広さの部屋（プレイハウス）を設置して、犬の好きなひとたちと子犬たちとの出会いをこのプレイハウスでつくり、人間の暖かい心のふれあいを子犬たちに経験させ、盲導犬の質の向上に努めようとするものである。

### 5. 盲導犬の適性テスト

盲導犬に課せられた必須の仕事というのは、歩いている人や止まっている人にぶつからないように、また障害物に対しても視覚障害者がぶつからないように進むべき道を選択して、視覚障害者を安全に誘導することにあり、交差点においては立止まり、主人の行きたい方向を指す命令を交差点ごとに待つわけだが、これら主人の命令に対しても、従ってよい命令とそうでない命令があり、安全な場合にのみ、その命令を受け、行動する。このような仕事だから、非常に高い集中力が要求され、ねこや犬などの他の動物、さまざまな物音、周囲の変化、臭跡等によって、注意が散漫であってもその仕事に支障がでる。

憶病や攻撃の兆しを見せず、人なつっこく親しみやすい犬であることも大切である。すなおでよく言うことを聞き、率先力もまた発揮できなければならぬ。

視覚障害者の要求する仕事に喜びを感じ、かつ精力的に取組め、主人のそばにいて、主人と共に行動することが楽しく、いつでも落着いていて、冷静な判断ができる犬が好ましい。最初のテストでは憶病の度合や疑問の程度を含め、犬に表われる16項目をチェックする。集中力とか喜んで仕事をする度合の評価をする。当然注意が散漫になる度合も記録される。その他、犬の聴覚、触覚、

率先力、気分の安定度とかいった項目もあるわけである。盲導犬の訓練に適するかどうかのこれらのテストは生後12ヶ月になった犬に実施され、その後、身体検査を受け、合否が決定される。

テスト期間は約3週間であるが、ときとしてそれ以上検討する場合も生じる。盲導犬になれる犬には肉体的に健全なことも当然要求される。不合格になった犬は一般的なペットになる。

① 犬種について — シェパード、ラブラドール・レットリーバー、コリー、ボクサー、ドーベルマンその他多くの犬種が使われている。盲導犬にとっては、犬種そのものに重要性はなく、正しい性格、正しい体型、正しい素性を持った犬が使われる事がきわめて重要である。現在日本

ライハウスマではラブラドール種だけを使っている。

② 大きさについて — チワワのように小さすぎたり、またグレートデーンのように大きすぎたりすると、人と犬との歩行上のバランスが保てないので、大きさに関しては中型犬が使用される。

③ 性別について — 牡、牝は問わない。（注：

表1 テスト表

犬名	性別	年令	開始日	完了日	歩行数	判定														
担当者の氏名																				
N	S	C	W	D	DD	CD	AD	ND	SS	HS	BS	A	NA	T	I	E	A			
得点 1 — 5 5(高い)																				
身体の発育状態と体格、犬種																				
健康状態																				
四肢の状態							歯の状態													
推定される学習能力																				
備考																				

（頭文字の説明）

N: 偏病の度合(NERVOUSNESS)、S: 疑問の度合(SUSPICION)、C: 集中力の度合(CONCENTRATION)、W: 喜びの度合(WILLINGNESS)、D: 注意散漫の度合(DISTRACTION: GENERAL)、DD: 犬に対する注意散漫の度合(DOG DISTRACTION)、ND: 猫に対する注意散漫の度合(CAT DISTRACTION)、AD: 動物に対する注意散漫の度合(ANIMAL DISTRACTION)、SS: 言葉シャイの度合(SOUND SHYNESS)、HS: 听覚の感度(HEARING SENSITIVITY)、BS: 触覚の感度(BODY SEXISITIVITY)、A: 攻撃(AGGRESSION)、NA: 慢病からくる攻撃(NERVOUS AGGRESSION)、T: 気分の安定度(TEMPERAMENTAL STABILITY)、I: 先取りの度合(INITIATIVE)、E: 兴奮の度合(EXCITABILITY)、A: 不安の度合(ANXIETY)

牡に関しては生後 6 ~ 7 ケ月頃に去勢が行なわれ、牝に関しては盲導犬として適性であると認められた時に、卵巣摘出手術が実施される。)

- ④ 年令について — どの犬種に限らず成熟したとみなされる時にテストが開始される。ラブラドールに関しては生後 12 ケ月以上生後 30 ケ月位までである。

## 6. 盲導犬の訓練

適性テストに合格した犬の訓練が約 5 ケ月間実施される。この盲導犬の訓練は簡単な引綱の訓練から複雑な仕事へと次第に進められる。環境も静かな単調な場所から繁華な複雑な場所へと展開していく。犬を訓練するには訓練士と犬との関係に愛情の絆が必要である。

訓練のほとんどが一般路上で実施され、犬のコントロールには声符の使用、声符の理解に重点が置かれる。犬をコントロールするにはハーネスのハンドルや引綱をゆすったり、引張ったりする肉体的矯正方法もあるのだが、あくまで声符の使用、声符でのコントロールに心がけ、その努力をすることが大切である。

ハーネスのハンドルは犬の動作を主人に告げるもので、犬との多くの経験をもつことにより、その犬の主人はハンドルを通して、犬の行動、どんなところをどんなふうに歩いているのかを理解できるようになる。

障害物の回避訓練では人造の障害物を利用して犬に分りやすく教えられる。同じように車に対する訓練も訓練用の車を使用して実施される。自然下での車との接触だけでは、車の危険性を把握する充分な練習のくり返しができないので人造交通がとり入れられている。

起りうる事態を想定して、自動車の運転速度を変えたり、方向を変えたりして車に対して、あらゆる角度からの補強がなされる。この車に対する訓練は長年に渡って、さまざまな方法がとり入れられてきた。犬に恐怖をうえつけて教えるものからエンジン音によって教えるものまである。しかしながら現在に至っては、恐怖を伴わなく教えることができる。また恐怖とのかかわり合いの

ない訓練こそが大切なのである。

- ① 視覚障害者を誘導する犬の訓練においては犬を理解するという視野から犬を取り扱い、将来視覚障害者の必要に応じるため、その理解を活用し、犬を盲導犬として作り上げなくてはならない。
- ② 訓練は盲導犬としての将来の任務にとって当然と考えられる環境と起り得るかもしれない危険な事態を十分考慮して実施する必要がある。
- ③ 訓練の段階と期間

第1段階：犬が示す経験不足を補う。（約1ヶ月間）

第2段階：犬に盲導犬としての仕事を紹介する。（約1ヶ月間）

第3段階：犬にハーネスを取り付け、実技に入る。（約2ヶ月間）

第4段階：視覚障害者の代役を務め誘導力を養う。（約1ヶ月間）

#### 〈訓練内容〉

- a. 引綱で人の左側通行。
- b. 定速歩行。
- c. 引張らないで一步前を歩く。
- d. ハーネスをつけての仕事。
- e. 注意散漫の克服。
- f. いき過ぎの行動を矯正。
- g. 消極的な行動を励まして肯定的にする。
- h. 声符によるコントロール。
- i. 服従一座れ、待て、来い等。
- j. 集中力を養う。
- k. 引綱をゆるめた状態で側進する。歩道のへりで止まる。まっすぐ立つ。  
まっすぐに横断する。左へ曲がる。右へ曲がる。止る。後退。
- l. 明確な障害物や道のへりの認識。
- m. 指示された方向の記憶。
- n. 訓練期間中はできる限りの機会を利用して自然の交通機関と慣れさせる。

- o. 石肩の補強。
- p. 人造交通。
- q. へり石のない交差点で止る。
- r. より明確な障害物の認知。
- s. 自然な障害物。人造的障害物。部分的なもの。木。ロープ。
- t. 行き止まりで引返す。
- u. 地上の低い障害物。溝、穴ぼこ等。
- v. 階段で止まる。昇降。
- w. 階段の長いもの短いもの。また幅の違う階段等に慣れさせる。
- x. ゆったりした歩調で歩行する。
- y. 乗物の入口、出口を見つける。
- z. 建物の入口、出口を見つける。
- a'. 店内、レストラン内等での行動。
- b'. エレベーターの利用に関する練習。
- c'. 電車、バス等公共輸送機関の利用に関する練習。
- d'. 必要に応じ、座ったり伏せたりする。
- e'. 座席を見つける。
- f'. 人の後について歩く練習。

## 7. 盲導犬の取得者の条件

- ① 全盲または光覚、眼前手動弁程度の視力の者。
  - ② 18歳以上60歳くらいまでの者。
  - ③ 犬が好きで、独立歩行を希望する者。
  - ④ 1ヶ月間の合併訓練を連続して受けられる者。
  - ⑤ 家庭環境が整っていること（家庭内に犬嫌いな者がいないことなど）。
- 社会参加促進事業の一環として盲導犬育成事業を実施している自治体に在住の視覚障害者は最寄の福祉事務所に申し込み、認定された場合、原則として、無料で盲導犬が取得できる。またそれ以外の場合でも、慈善団体（ライオンズ

クラブ等)の協力により無料で取得できることもあり、個人負担も可能である。

さまざまな条件の中でも本人のひとりで歩きたい、自立したいというやる気が大切である。次に面接する際に考慮すべき事柄を列挙する。

- ① 盲導犬を希望する動機。
- ② バランス — 歩行中。ヘリ石。家の周囲。悪路。腕の握り。
- ③ 身体的要素 — 体重。身長。体格。筋肉の発達の度合。
- ④ 精神的因素 — 質問の質。他人に対する態度。犬を持とうとする心構え。精神的能力の評価。失明前、失明後のリクリエーション活動と仕事の経験。質問に対する反応。強い癖。盲への適応とその受けとめ方。
- ⑤ 反射と敏捷 — 心身において、歩行中、静止時、歩き始めるとき等の方向運動に対する反応。
- ⑥ 活動 — ひとり歩きの経験。杖の使用 距離的にはどうか。外出の度合。地域の総体的な知識。方向感覚。歩行器具の正しい理解と認識。(例:風の方向。音の認識。道路の表面。交通状態の判定。)
- ⑦ 不完全視力について — 視力の度合。見えるものの種類(視野)。(例:狭い。不鮮明度。影や動くものの認識。いつどこで視覚の使用が行なわれるか。視力の信頼度。不完全視力の影響。)
- ⑧ 犬に対する態度 — 犬との経験や他の動物との経験。動物の総体的な理解。家庭にいるペットの状態。
- ⑨ 申込者の職業と家庭環境 — 主婦の場合:家が常に整理整頓されているか。子供達のしつけ。清潔さ。家族の協力の度合。  
妻帯者の場合:職業。家族に対する態度。社会的習慣。  
独身者の場合:職業。社会的習慣。両親に過保護にされているかどうか。
- ⑩ 健康状態 — 再発している障害と病気。休まずにどの位歩くことができるか。犬と動くことを邪魔している障害は何か。失明の期間。失明原因。
- ⑪ 犬に対する家庭状況 — 家屋の種類と大きさ。犬の寝室の広さ。家庭に犬を持つことに対する態度。庭の広さとその庭の囲いの有無。犬が庭を走ることに対する態度。借家であるかどうか。

- ⑫ 居住地と通勤上の環境 — 地域  
の総体的な説明。道路事情。交通  
状況。ショッピングセンター、公  
共輸送機関、工場や事務所に犬を  
入れることに対しての雇用主の態  
度。申込者が盲導犬所有者を知っ  
ているかどうか。申込者の生活態  
度（肯定的、否定的）。犬を持つ  
ことに対する家族の態度。家庭の  
雰囲気。家庭内の争い事。犬を維  
持する費用。食物。治療費。声の  
構成（強さ、発音）。
- ⑬ どういったタイプの犬が適合す  
るかということにまで問題を展開  
させる。また他の歩行器具につい  
ての考察も必要である。

表2 面接用紙（指導員用）

氏名	年令	宗教
住所		電話
職業		
雇用主の犬の見方		
糖尿病	インシュリンの投薬	
失明の期間	視力	
バランス	聽力	
反射神経	歩行速度	
オリエンテーション		
介添者（ハンドル）との同調		
声の調子と質		
活動状態（歩行）		
更生訓練施設の履歴		
盲導犬を使いこなす能力		
運動機能（特にかけ足）		
家庭状況と家庭の態度		
面接者に対する態度		
犬を持つことに対する態度		
盲導犬を扱う能力		
身体的	声符	動作
備考		

### 8. 視覚障害者と犬との合併訓練

犬の訓練が完了すると指導員は視覚障害者と犬との合併訓練を1ヶ月間もつ。この合併訓練は1クラス4名の生徒を受け持って実施されるのが普通だが、日本の場合（日本ライトハウス）、視覚障害者自身、犬とのかかわり合いが少ないことや犬の行動の理解の度合いが外国に比して乏しいこと、それをつけ加え、視覚障害者を取巻く環境が必ずしも良くないことから2名の生徒で実施されている。

この訓練期間中、生徒は訓練所の宿舎に犬と共に滞在し、朝早くから夜遅くまで指導を受ける。

最初の数日間は犬を使用せずに、指導員が犬の代りを務め、犬との歩行に関する命令の仕方、犬の行動、歩行上のルール等が視覚障害者に教えられる。

その間、指導員は指導を通して、生徒の性格の特徴、反応速度、身長体重の割合、声によるコントロールの能力、オリエンテーションの能力等を把握して、個々の生徒の犬の最終決定に備える。

この犬の決定は以上のような個々の性格や能力と生徒の家庭環境、職種、勤務先の環境、生徒の将来の要求等を考慮に入れて、最も適してある犬が選ばれる。例えば電話交換手の場合であれば、勤務中の長い時間帯を彼女のそばで楽しく満足して寝ていられる犬が要求される。

犬の世話の仕方や取扱い方法は最初から指導され、夜は質疑応答、犬をより深く理解するため、犬の感覚、動物の訓練の原則、動物の行動の理論を講義によりませ、安全への強化と生徒の長所を伸ばすため、さまざまな環境での経験が積まれるよう配慮され、実技と講義が展開される。

表3 合併訓練予定表（日本ライトハウス）

午 前 の 部	午 後 の 部
第1日目 館内オリエンテーション	館内及び訓練生の諸規則
2 屋内歩行、講義	ハンドルワーク、オリエンテーション、講義
3 ハンドルワーク、屋内歩行	ハンドルワーク
4 犬の決定、講義	屋内歩行（引綱による）
5 直線歩行（戸外）	屋内歩行、犬のコントロール
道路横断	直線歩行（戸外）
6 スピードコントロール	スピードコントロール
服従訓練、講義	ハーネスコントロール（引綱も含む）
7 道路横断	道路横断（車歩道区別なし）
8 右折、左折を含む練習	右折、左折を含む練習
	講義
9 服従訓練（Sit. Come. Down. Stay. Heel）	簡単な歩行（長距離）
左折、道路横断	右折、道路横断

10	簡単な歩行	服従訓練 左折、道路横断、講義
11	ハンドルワーク（障害物の回避）	障害物の回避の練習
12	障害物の回避の練習	障害物の回避の練習
13	応用歩行	応用歩行 トンネル内での歩行
14	応用歩行 (ハンドルワーク)	応用歩行 講義
15	応用歩行	喫茶店の利用に関する練習、講義
16	人造交通	人造交通
17	人造交通	人造交通 簡単な歩行 講義
18	喫茶店の利用	応用歩行
19	公共輸送機関（電車）を利用するに関する練習	応用歩行 講義
20	公共輸送機関（電車）	応用歩行
21	公共輸送機関（バス）を利用するに関する練習	公共輸送機関（バス） 講義
22	公共輸送機関（バス）	応用歩行 人の後について歩行する練習
23	応用歩行 トンネル内での歩行	応用歩行（D.D） 講義
24	簡単な歩行	簡単な歩行（長距離）
25	ハーネスコントロールの再検討	応用歩行 講義
26	繁華街の歩行 人の後について歩行する練習	繁華街の歩行（買物も含む）
27	繁華街の歩行（買物も含む）	犬の入浴
28	ハイキング	簡単な歩行 講義 ハイキング パピーウォーカーとの懇談会
29	応用歩行 講 義	応用歩行 夜間歩行
30	買 物	応用歩行 講義
31	合併訓練終了予定	

#### 〈合併訓練講義内容〉

1st Lecture—価値ある結果を得ることが容易ではない事。犬とのチムワーク。人と犬がお互に適合しなければならない。犬ならびに人の調子。学ばれる全てが家庭での生活と密接な関係があること。犬を受取る時期について、訓練所の諸規則。

2nd Lecture—ハンドルに関する練習：バランスと歩行。犬との位置。命令。方向転換。これらに関する質問。理解。言行一致。忍耐。経験の重要性。正しい方法に於て進展されるべき経験の必要性。引綱とチェーンカラーの使い方。1ヶ月間実施される訓練のアウトライン（地域その他）。

3rd Lecture—犬を受取るに関するきまりきった仕事。部屋の整理、整顿。静かに犬に近づくこと。落着いていない犬について。引綱での犬のコントロール。大小便の練習。犬をコントロールする際の総体的な取扱い。声の使い方。夜間における犬の行動の慣例。動物の訓練の主なもの討議。盲導犬運動の歴史。

4th Lecture—廊下でのスピードコントロール。道路横断の手順。犬の手入れについて。服従（手順、理由）。基礎的な命令（前へ、ストップ、レフト、ライト、バック等）。指示したり励ます時に使用される言葉。

5th Lecture—犬を友人に紹介する場合の注意事項。食餌を与えるためのアウトライン。ハーネスコントロールのアウトライン。

6th Lecture—右肩の障害について。スピードコントロール。犬を友人に紹介する際は自室を使用しない。攻撃の防止。

7th Lecture—これまで行なった講義の再検討。

8th Lecture—レポートシステムについて（仕事面、健康面）。犬の入浴について。方向の記憶。オリエンテーション。一般の人の協力。

9th Lecture—障害物回避の練習（位置その他）。盲導犬を取扱う上の規則（コントロール、レストラン、ナイトワーク）。

10th Lecture—階段。買物。口輪について。エスカレーターについて。

11th Lecture—晴眼者の援助。人造交通。犬の大小便回数。

- 12th Lecture —これまでに行なった講義の再検討。宣伝について。
- 13th Lecture —犬に対する注意散漫について。レポートシステム。
- 14th Lecture —公共輸送機関（バス、電車等）。犬の食事（献立表）。
- ナイトワーク。
- 15th Lecture —犬の健康診断。薬の与え方。その他について。健康についての討議。免疫について。
- 16th Lecture —契約書。家庭にいるペットについて。攻撃の防止。
- 17th Lecture —再討議。

#### 9. フォローアップ

1ヶ月間の合併訓練が終了すると視覚障害者と犬とのチームが誕生する。このときが盲導犬所有者にとって最も上手に歩行できるときではなく、社会へ巣立つスタートラインである。将来の行動範囲の拡大とか安全性の獲得、効果的な歩行への可能性をより高めるためには盲導犬所有者の犬に対する希望、要求、犬を動かす能力とかに依存する面も多いのだが、ひとりで歩きたいと願いひたすらに努力することが大切である。盲導犬所有者が訓練所を去った後も、訓練所と盲導犬所有者との間に協力体制が取られ、必要に応じて指導員がフォローアップのため盲導犬所有者を訪問しアドバイスする。

視覚障害者の行動上の悩みを解決するためには、白杖による歩行訓練、盲導犬による歩行訓練、電子機器の利用による歩行訓練が開発され実施されている。よく、杖、盲導犬、超音波メガネに関してどれが一番すぐれているかという比較がなされるが、各々は長所短所を持ち合わせており、必ずしも盲導犬が最善のものだと言い切れるものではない。その人にとって有益な状態を完成させるには、時には杖を通してであり、時にはそれ以外の訓練であるかもしれない。また、これら全ての訓練が実施されることもあり得る。視力の回復が医学の発展により眼の再生によって可能になるまでは盲目から生ずる色々な問題を直視

し、その人に適した訓練を実施する必要がある。

盲導犬がどうして視覚障害者の効果的な歩行の助けになるのかを答えるのは容易ではない。だがしかし、他のいかなる歩行補助具を使用しての視覚障害者より、安全かつ広範囲に行動できることが認められている（ニューヨーク社会事業学校のリサーチセンター = the Research Center of the New York School of Social Work 1960年）。また盲導犬は盲導犬所有者の歩行補助具としてだけでなく、それ以上のものである。合併訓練終了後の盲導犬所有者の行動範囲の拡大、安全性といった可能性への広がりは、犬の主人である視覚障害者の犬を動かす能力、犬とその主人との間にかわされる互いの思いやり、愛情の絆、信頼の絆の芽ばえによって発展、展開していくのである。ただ単に技術的に優れた視覚障害者、すなわちオリエンテーション技術に優れ、歩行のバランスも良く、反応に対する敏捷な動作も持ち合わせており、かつ知的な盲導犬所有者だとしたら、当然のごとく素晴らしい優れた犬と視覚障害者のチームだと思うかもしれない。これらの要素だけでは平均的なチーム、平均的な仕事の達成であると言える。

のことからしても、ただ単なる杖、器具といったものとは違う。盲導犬は生きた杖と言える。また盲導犬が便利だから、誰でもどうぞと言う訳には行かない。視覚障害者すべてが盲導犬と共にやって行けるものではないからである。例えば若すぎても年をとりすぎても盲導犬はもてない。また、犬の世話が嫌いであったりしても駄目である。このことからしても杖のように視覚障害者全般というようにはいかない。非常に少ない範囲の人しか使用できない。そしてそれはニューヨーク社会事業学校のリサーチセンターの調査結果が示す1%以内であるかもしれない。しかし、その人にとってより高い可能性の追求、自立の素晴らしさを考えると、それが1%以内であるからといって止める必要は全くない。同時に「ちょっとそこまで」といった行動の自由の獲得のために、視覚障害者全体のために、行動訓練を実施すべきであると考え、技術の開発、改良の推進に努力すべきである。以上のことふまえ、盲導犬のあり方を次号に記す。

### 参考文献

- Fox, Michael W., Understanding Your Dog, A Brief History  
of Dog Guides for the Blind, Nelson Coon, 1959
- Frank, Morris and Clark, Blake, First Lady of the Seeing  
Eye, 1957
- Holdsworth, J.K., Selection and Training of Guide Dogs for  
the Blind
- Scott, J.P. and Fuller, J.L., Dog Behavior
- 芝池弥太郎, 犬の世界
- Wilkes, Monty Hamilton, Guide Dogs in Australia, 1970